

トータルなお誂えのものづくりを法人向けにプロデュース 新工芸研究会

新工芸研究会では、琳派の凄烈で斬新なものづくりを可能にした「仕組み」に焦点を当てて研究、それを現代のビジネスモデルとして構築し、法人向け「お誂えのものづくり」として提案しました。

京都には千の技術と感性があるのだから

京都には伝統的な技法から最先端のものまで、ものづくりのあらゆる技術があります。「千の技」と呼んでもいいほどで、それぞれ「京都で作れないものはない」と云っても過言ではないでしょう。安く大量に作ることは苦手かもしれませんが、個々の注文に対応する丁寧なものづくりであれば、研究開発や試作も含めて大抵のものは製造可能です。それも単に図面通りに作るばかりでなく、注文主の意図を汲んで逆提案もし、注文主の当初の期待以上のものを作って納める。そこには作り手と注文主とが長年にわたり培ってきた暗黙の了解や共有してきた価値観などがきちんと反映されています。

しかし京都にそれだけの技術と感性があるにもかかわらず、潜在的な注文主からの注文をまだまだ取れていないのではないかと。その方々に向けて、京都ではあらゆる技術を生かしたものづくりのプロデュースができることを目に見えるかたちで発信し、国内はもとより世界から問い合わせや注文を受ける窓口を立ち上げられないだろうか。そこから今回の研究がスタートしました。

琳派の「仕組み」を研究テーマに

2015年は琳派400年の記念の年ということで、京都では様々な催しや取組が行われ、新工芸研究会でも琳派にちなんだ研究テーマを設けましたが、その研究対象は琳派の創作物ではなく、それらが生み出された「仕組み」に焦点を当てました。あのよう凄烈で斬新な作品が次々と生み出された背景にはどんな「仕組み」があったのかを探り、それをあらためて現代に構築して運用できないか、というものです。

思い切った創作の陰には注文主の存在が

琳派研究者の話の聞いたりして研究を進めた結果、例えば尾形光琳は挑戦的な作品をプロデュースすると同時に、江戸に居を構える大名などを対象に、今で云うマーケティングやセールスプロモーションをしていたことが分かりました。見本となる小品を預けて注文を取りに行くなどの動きをしていたのです。京都の呉服商の家に生まれた彼は自然とビジネスの感覚を身に付けていたのでしょう、当時のメイン顧客であった武家、公家、社寺、そして豪商を対象に、作品を供給しつつ新たな需要を喚起していたものと考えられます。次々と注文があったからこそ思い切った作品づくりに打ち込めたのです。

現代の武家や公家、豪商に向けて

では現代において、京都にある優れた技術を惜しみなく駆使した鮮烈なものづくりを行うためにはどうすればいいか？ まずは、それを求める、注文してくれる顧客が必要です。当研究会では、千の技と感性を持つ京都のものづくりの特性をベースに、現代版の「琳派のものづくり」の「仕組み」を考えました。その一つの答えが、法人向けの「トータルなお誂えのものづくり」です。主な対象はまず京都の大企業、そしてホテルや百貨店、行政機関、さらには「日本の

なもの」を欲している首都圏や海外の企業などにも及びます。そういった個々の法人に向けたそれぞれオリジナルのものづくりを、京都の技術と感性を生かして、トータルにプロデュースし、製造してお納めする。そういう一連のお誂えのビジネスモデルを考えました。お客様はその窓口にご相談するだけで、京都の特性を生かした自社オリジナルの様々なアイテムをトータルに誂えることができるというわけです。

仮想の事例として「お誂えのものづくり展」を開催

「う～ん、理屈は何となく分かるけど、実際にどんなものを提案してくれるの？」それを具体的に見て実感していただくために「京都老舗の会」様にご協力をいただき、会員である島津製作所様の本社ロビーをお借りして2016年3月に「お誂えのものづくり展」を開催させていただきました。お誂えというのは本来、注文があって初めてスタートするものですが、今回は島津製作所様を仮想の注文主とさせていただいて、具体的に「お誂えのものづくり」のトータルプロデュースを行い、個々のアイテムのデザイン開発と試作を進めました。



「お誂えのものづくり展」(2016.3.13-25 島津製作所本社)

創業社屋のステンドグラスや理化器械とモチーフに

現実のお誂えでは注文主の意向をヒヤリングするところから始めますが、今回は島津製作所様の本社ショールームや創業記念資料館を取材することでそれに代えさせていただきました。具体的なデザイン展開のモチーフとしては、創業時の建物の軒下にあるステンドグラスの意匠や、昔のカタログにあった理化器械の図などを活用させていただき、現在のビジネスの主なシーンとして「迎(おもてなし) 大切なお客様をお迎えする」、「儀(さほう) 美しい所作とたしなみ」、「設(しつらえ) 応接や会議室の空間づくり」、「贈(おく) お客様の心に残る記念品」、「業(なりわい) 日々の仕事で使うステーションナリー」、という5つの場面を設定して、それぞれ具体的なアイテムをトータルにデザイン開発し試作して展示しました。駆使した技術や素材は工芸分野だけにとどまらず、ステンレスの切削やレーザーカット、ゴムの成形など多岐にわたっています。

京都企業を挙げて”懐紙”を復活させませんか

今回の提案の中で特に人気を集めたのは懐紙です。最近ではお

茶席だけで使うもののように思われがちですが、本来は文字通り懐に入れて持ち歩き、包んだり、拭いたり、書いたりと様々な用途で使われてきた便利なもの。例えば社員の皆さまが常に携帯されて客先で使われると「さすが京都の企業はちがうなあ」と評判になりそうで、さらに多くの京都企業がそれぞれ自社オリジナルの懐紙を作り日々使うようになれば、トータルな京都価値が高まるのではないのでしょうか。

京都の特性を活かしたトータルなお詠えの窓口として

新工芸研究会がこれまでの研究成果を発表提案する場として開催いたしました「お詠えのものづくり展」は各方面で好評を得、お問い合わせもいただいております。今後は京都の大手企業に加えて行政機関やホテルなどに向けた「お詠えのものづくり」をプロデュース

しながら、現代の光悦や光琳として京都のものづくり企業と世界の潜在顧客とをつないでいく、そんな立場で京都の産業振興に貢献できればと考えています。(まとめ 古郷主任研究員)

新工芸研究会について

京都の伝統的な工芸品に新素材を融合させた新しい工芸品の開発を目的に1981年に「新工芸創作研究会」として発足。2007年からはその研究対象を「もの」から「こと」にまで広げて「新工芸研究会」と改称。京都の文化と工芸の歴史的経緯を踏まえ、産学公連携のもと新たな京都工芸の創造につなげる研究を推進し、京都の産業及び文化の振興発展に寄与することを目的として活動しています。現在は工芸やデザイン関連の企業10社で構成。当センターのデザイン担当で運営支援をしています。

■「お詠えのものづくり展」で開発提案したアイテムの一部をご紹介します



理化器械文様を型押ししたオリジナルの懐紙



理化器械文様をレーザーで透し彫りした扇子



理化器械文様を織り出した西陣織の名刺入れ



汎用X線装置(大正8年発売)のメーター部をモチーフにした菓子(和三盆)とその木型



見込みの部分に社章を刻印したお碗



陶磁器や鉄、漆など様々な素材の多目的プレート



実験器具「交通水槽(連通管)」型の花生け



ステンレス材を削り出した「ペンハムのコマ」

お問い合わせ先

京都府中小企業技術センター 応用技術課 デザイン担当 TEL:075-315-8634 FAX:075-315-9497 E-mail: design@mtc.pref.kyoto.lg.jp